

「若手研究者支援」(海外調査)	
<b>後期ドビュッシー歌曲における詩の音声の音楽化について パリでの調査及びアテネでの学会発表</b>	
氏名 小阪 亜矢子	比較社会文化学専攻 博士後期課程 3年
期間	2022年8月15日～2022年9月1日
場所	パリ、アテネ
施設	マラルメ博物館、ルーヴル美術館、アテネ大学他

## 内容報告

### 1. 研究目的と海外調査研究の必要性

#### 1.1 研究目的

報告者の研究はドビュッシー DEBUSSY, Claude (1862-1918) の後期ピアノ付き独唱歌曲のうち、定型詩に作曲されたものについて、詩の音声的特徴及びそれが楽曲内でどのように音楽化されているかを明らかにすることを目的としている。IPA 国際音声記号を用いて詩を音素の単位に解体し、各音素と音価、音高、音程、和声、表情記号、速さなどの音楽的要素と重ね合わせ、テキストの持つ音声は楽曲にどのように作用しているか、また作曲家が楽曲においてテキスト音声をどのように拡大しているかを分析する。演奏時に想定される全ての音を可能な限り記号化・数値化することで、現代音楽の祖であり文学に造詣の深い作曲家ドビュッシーの、歌曲作品における音世界を実証的に解明することを目的とする。

#### 1.2 研究対象

本調査では、該当する作品のうち、《ステファーン・マラルメの3つの詩》(1913年、詩：マラルメ MALLARME, Stéphane (1842-1898))《雅やかな宴 第2集》(1904年、詩：ヴェルレーヌ VERLAINE, Paul (1844-1896))の2作品を対象を絞った。2作品は、同時代の詩人による定型詩に基づいた曲という共通点がある。いずれの作品にも作者から見て過去のフランス、特に18世紀のロココ趣味を喚起させる部分がある。《マラルメの3つの詩》第2曲〈あだなる願い〉については、宮廷恋愛を思わせる内容が描かれており、《雅やかな宴 第2集》は元になった詩集『雅やかな宴』Fêtes galantes 全体が18世紀の貴族の宴を表現したものである。

2作品の間の9年間でドビュッシーはヴィヨン VILLON, François (1431?-1463)、シャルル・ドルレアン Charles d'Orléans (1394-1465)、レルミット L'HERMITE, Tristan (1601-1655) の詩に作曲しており、古いフランス詩への傾倒があったと考えられる。同時代の詩はより散文的であったり、前衛的なスタイルで書かれるようになっていたが、ドビュッシーは《ビリティスの3つの詩》を除いて散文詩に作曲しなかった。同時代の作曲家で少し後輩のラヴェル RAVEL, Maurice (1875-1937) が散文詩に基づいた多くの歌曲を作曲している態度とは対照的である。

#### 1.3. 海外調査の必要性

本研究の試みは、音楽と詩という文化的な内容を、IPAを用いて記号化・数値化することで実証的に捉えるというものである。しかし、そこで言語が用いられている以上、意味論から完全に逃れることはできない。語や詩形がフランス語圏でどう捉えられるのか、また、それがどのような場所でのどのような音で読まれ(あるいは読まれることを想定され)、歌われたのか、といった問題が未解決であった。

報告者は2008年から2011年にかけてパリ近郊に居住し、県立音楽院の声楽科に在籍していた。しかしその当時は声楽技術の鍛錬に終始し、音楽学的な視点をほとんど持っていなかったため、本学研究科博士前期課程に入学した後にフランス再訪を強く望んでいた。

また、いずれの作品も研究が進んでおり、多くの自筆資料が pdf など公開されているが、扇に直接書かれた詩など、写真では詳細がわからず、肉眼で見る必要のある資料が何点かあった。また、ドビュッシーが観たとされる 18 世紀の雅宴画と呼ばれる美術作品を調査し、20 世紀初頭のフランス文化において共有されていた 18 世紀文化がどういったものか理解する必要があった。

さらに、この研究を国際音楽学会で発表し、世界の音楽学者の意見を仰ぐことで、より研究の精度を上げる必要があった。

## 2. 滞在中の活動及び成果

### 2.1 概要

パリ滞在前半においては詩人の資料をまとめた博物館や、関連する美術作品を調査した。その後、アテネにおける学会発表を経て、ご参加の皆様にご質問やご意見を頂き、課題を拡大しつつ整理することができた。特に音素と音楽の関係を考えるにあたって、本研究が意味論に傾きかけていることに気づき、音色やテクスチャの問題を調査する必要性に気づいた。後半のパリ滞在ではそれを踏まえて、ドビュッシーと同時代の美術作品や、楽器の見学・調査を行った。以下に詳細を述べる。

### 2.2. パリを拠点とした調査①（マラルメ博物館、ヴェルレーヌ博物館、ルーヴル美術館）

マラルメ博物館はパリの南側の郊外、セーズ・エ・マルヌ県にある、美しい庭を持つこじんまりした家である。19 世紀末から 20 世紀初頭のフランスの文化人が休暇のために郊外に邸宅を持つことはよくあったが、マラルメもそうした家を持ち、それが現在では博物館になっている。ここではルー・ロベール女史に館内及び奥の資料庫を案内してもらった。館内には今回の目当てであった自筆資料の 1 つである扇が展示してある。マラルメは親しい女性に自作の詩の書いた扇を贈呈することがよくあった。《ステファーン・マラルメの 3 つの詩》の第 3 曲〈扇〉はマラルメが娘のジュヌヴィエーヴに贈った扇に書かれた詩が元になっている。扇は非常に張りのある材質で、詩がよく読めるように書かれており、女性が持つ扇としては美しいが少し大ぶりでごつごつした印象で、装飾品としてよりも詩作品としての意味合いが強く見て取れた。また、とてもよい状態で保存されていることに驚いた。また、同じような扇がもう一点展示されていたが、こちらも劣化があまり見られなかった。

各部屋は驚くほど狭く、広い庭と対照的である。マラルメの有名な「火曜会」（毎週火曜日に文化人がマラルメの元に集い、煙草を片手に様々な対話を繰り広げていた会合）が行われていたというテーブルも小さく、親密な対話が想像された。音は日本家屋に比べてよく響くが、響きすぎるということはなく、また実際に人が居住している場合は服やリネン製品などで布が増えるため、より吸音されるだろうと予測できる。先ほどの扇にしても、家具調度品やマラルメの使用した肩掛けなども含め、非常に保存状態が良い。またロベール女史は午後になると夏休みの子供向けのワークショップを行っていた。フランス語話者にとっても難解なことで知られるマラルメの詩だが、そのマラルメの施設で子供向けのイベントが行われていることは意外であった。ほとんどが庭で遊ぶような内容だったが、子供の頃からマラルメに親しませ、詩や資料を守ろうとする気概が感じられた。なお資料庫には世界のマラルメ関連の資料が集まっており、日本語のものも含まれていた。そこでマラルメの詩の音声に関する研究や、近現代の作曲家の詩への付曲に関する研究を教えていただき、入手困難なものを複写し、在庫のあるものをパリ市内に戻って買い求めることができた。

ヴェルレーヌ博物館はランスの先であり、公共交通機関ではたどり着けない場所であるため、友人夫婦の自家用車と運転に頼って訪れた。こちらはパリから高速道路を使っても数時間かかる上、博物館から少し離れると見渡す限りの畑以外に何もない場所に出る。この建物は、放埒な私生活で知られるヴェルレーヌが反省の色を見せるために唐突に農業を始めるとして住んでいた家の、向かいの民宿だったものだ。田舎の広い家で、ヴェルレーヌにまつわる展示の他に、特にヴェルレーヌと関連のない公共の展覧会が行われていた。ここではヴェルレーヌの生涯と作品について講演を聴くことができた。一般向けの講演だが、「ヴェルレーヌは奇数韻を使うなど、定型詩を壊すことに取り組んでいたが、そもそも当時のフランス詩壇の潮流は散文詩に向かっていて誰も定型詩を書いていなかった」という話があっさり登場することが印象的だった。「定型詩」を「七五調」に置き換えて日本の詩に置き換えて考えてみると確かにごく一般的な話だが、自分にはそうしたフランス語圏に生まれ育った人にとっての常識は不足している。人文学に携わる以上、定期的あるいは長期的に研究対象の地域に滞在することの重要性を実感した。

ルーヴル美術館においてはロココ絵画の調査を行った。ドビュッシーは生涯を通じてヴェルレーヌの詩に多く付曲しているが、青年期、中期、後期にそれぞれ『雅やかな宴』を取り上げている。これは 18 世紀の貴族の宴を題材にした詩集で、恋愛の様子やコンメディア・デッラルテと呼ばれるストック・キャラクターの世界が描かれている。その源泉となったのが 18 世紀美術の雅宴画と呼ばれる

絵画、ワトー WATTEAU, Antoine (1684-1721) やブーシェ BOUCHER, François (1703-1770) の作品である。これらはドビュッシーも観ており前述のマラルメはブーシェの名を《ステファーン・マラルメの3つの詩》第2曲〈あだなる願い〉に用いられた詩「あだなる願い」の初期稿「願い」で作品中に読み込んでいた<sup>1</sup>。「ワトーやブーシェ等」という粗雑な知識と共に作品群と対峙してしまったが、ワトーとブーシェがタッチや題材の扱いにおいて大きく異なることに気が付いた。「シテール島への船出」などでワトーが人物を小さく描き、森や池といった風景が深い色合いで大きな面積を占めて描かれている。これに対し、ブーシェの絵画は人物の表情がくっきりと描かれ、教訓や演劇的なメッセージが強く打ち出されているように感じた。また、より慎ましやかな家庭を描いた絵や、女性の臀部を大きく強調した絵などもあり、作品群で見ると一言で言い表し難い画家である。マラルメが詩「願い」を「あだなる願い」に改訂するにあたって詩行に詠み込まれていたブーシェの名前は消えている。報告者はこれを「直接的な18世紀の表現から逃れようとしていた」と解釈していた<sup>2</sup>が、そうした側面の他にブーシェの名が喚起するものが広範囲すぎるために誤解を生む可能性があつて変えたとも考えられる。

以上のようにパリ滞在前半ではフランスにおける近代詩の受容や、詩や音楽に表象されたものの実体、書かれた場所・状況などを駆け足ながら確認することができた。

## 2.3. IMS 国際音楽学会発表

### 2.3.1. 学会概要

報告者はアテネに渡り、21st Quinquennial Congress of International Musicological Society (第21回国際音楽学会世界大会、通称 IMS2022) において Musical Setting to the Sonority of Poems in Debussy's Late Mélodies 『後期ドビュッシーの歌曲における詩の音声の音楽化』という題目で発表を行った。大会全体のテーマは Music across Borders と題されており、報告者は最終日の Crossing timbral borders in Debussy / Avand-Garde Instruments のセクションで発表を行った。大会には世界各国から数百名の音楽学者が集まり、5日間に渡って様々な発表やラウンドテーブルが行われた。日本からの参加者も多く、音楽学における様々な分野の研究者の知己を得ることができた。

### 2.3.2. 発表内容

ヴェルレーヌの詩による《雅やかな宴 第2集》第2曲〈半獣神〉(1904) と、マラルメの詩による《ステファーン・マラルメの3つの詩》第2曲〈あだなる願い〉(1913) における音素の扱いを比較し、より後期にあたるマラルメの方で、楽曲とテキスト音声のより直接的な関係が見られることを発表した。研究目的、研究方法等は1.1.をご参照願いたい。この発表では特に母音に焦点を当てた。音程を作ること、引き延ばしが可能なのは母音であるためと、母音は複数の文化圏で似た音韻表象が見られるためである。

### 2.3.3. 質疑応答

報告者は作曲者による特定の音節の強調を、音素への反応であると結論づけて発表したが、これに対して、詩法上のアクセントへの反応とどう見分けるのかという質問があつた。報告者はこれに対して、実際の朗読では不可能な長さの引き延ばしが見られること、そして今回の発表に含まなかったが、全くアクセントのない音節の強調により、音素による効果が見られる曲が存在することを回答した。

また司会者より、この研究はフランス象徴詩に大きく関係するものと考えられるが、他の言語の詩についても同様のことが言えるかどうかという質問があつた。これに対しては、日本の島崎藤村による『小諸なる古城のほとり』から冒頭の「小諸なる古城のほとり／雲白く遊子悲しむ」という部分を引き、/o/や/u/の母音が連続する中に「し」 /ʃi/ の音が3度現れ、雲が浮かび上がるような効果が見られることを説明した。

また、発表時間以外にも何点か質問や意見を頂いた。1点は、マラルメの同音異義語に作曲者がどのように反応しているかという問題である。これに関しても、今回の研究対象曲には登場しないが、マラルメが詩行の中で浮かび上がらせている同音異義語や、音素を反転させてシンメトリーを作っている単語のペアをドビュッシーが作曲によって強調している例があることを紹介した。また、ドビュッシーの声楽作品の音素について報告者と極めて近い見解を持っている方からの貴重な助言も頂いた。

### 2.3.4. 発表を終えて

以上のように、大会では研究内容について大いに興味を持ってもらい、新たな課題を得ることができた。フランス詩法のアクセントの問題は難しく、特に英語・ドイツ語などとは構造が異なるが、こちらも数値化・図式化して音素の問題と組み合わせるなどの方法が必要だと感じた。また子音の扱い

の分析についてもヒントを得て、大きな成果となった。

また、発表後に自身の中で新たな問題点を発見した。報告者は詩の音声を *sonority of poems* と訳し、本研究では音素を楽曲の要素の一部として捉える、としているが、それ以外のドビュッシーの想定したソノリティがどういったものなのか、これまで無頓着だったことに気づいた。特に、学会発表で用いた〈半獣神〉に登場する”太鼓 (*tambourins*)” がどういった太鼓かということが不明瞭なままであった。曲全体を通じて音高の異なる 2 つの太鼓を表すようなピアノ伴奏が書かれている上、詩の中にも音素によって太鼓を表しているような部分があり、ドビュッシーがその音素に反応していることを発表内で述べたが、元の太鼓の音色が具体的に想定できていなかった。“*tambourin*” という単語は、作曲年代の近いドビュッシーの無伴奏混声合唱曲《シャルル・ドルレアンの 3 つのシャンソン》の第 2 曲〈太鼓の音が聞こえた時 *Quand j'ay ouy le tabourin*<sup>4</sup> (ママ) に登場する。この曲は無伴奏だが、合唱がヴォカリーズによって太鼓のリズムを模して歌い、テキストはすべてメゾ・ソプラノのソロによって歌われる。リズムカルな太鼓の伴奏と厭世的な歌詞という組み合わせが〈半獣神〉と非常によく似た構造のため、以前から関連が気になっていたが、漠然とこれら 2 曲に登場する太鼓を同じものだと考えていた。しかし、《シャルル・ドルレアンの 3 つのシャンソン》は中世の詩に付曲したもので、また太鼓は単数である。一方、《雅やかな宴》は同時代のヴェルレーヌの詩によるもので、題材も過去のものでは中世までは遡らず 18 世紀であり、太鼓は複数である。ドビュッシーと言えば万国博覧会でガムランの演奏を聴き感銘を受け、作曲にガムランの音階などが影響を及ぼしていることはたびたび指摘されている。しかし、太鼓に関してどんな出会いがあったのか、調査が必要であると感じた。

なお、報告者の発表は学会期間中最終日に当たり、他の研究者の発表はごくわずかのみしか聴けなかったことが悔やまれる。しかし同行の井上登喜子先生、林いのりさんの発表や、報告者と同セッションの方の発表、また自分の関心領域であるメシアンや古楽関連、オペラ演出の発表などに臨席することができ、大いに勉強になり、刺激を得ることができた。大会に関連するコンサートも何点か開かれていたが、これに関しては大聖堂で行われたビザンティン聖歌のみ聴くことができた。司教の方から世界の音楽学者への祝福があり、いち学生による研究の営みが世界に繋がっていることを気づかされ、身の引き締まる思いだった。

## 2.4. パリを拠点とした調査②

ここまでの調査及び発表を経て気づかされた最も大きな課題は、これまでの報告者の研究は「作曲家による音素への直接的な反応」を軸にしていながら、単語の強調など意味論に傾きかけていた点である。もちろん先に述べた通り、研究者による詩の意味内容の解釈、また作曲家が詩の意味をどう捉えたかを解釈することは重要であり、そこから完全に離れることは不可能だ。しかしドビュッシーはそこから逸脱しかけており、その鍵の 1 つが音素ではないか、というのが報告者の仮説の 1 つである。また、もう 1 点として、後期に進むほど「朗唱的」(朗読に近く歌われる<sup>3</sup>) とされるドビュッシーの歌曲において、音素を音楽的要素で強調することで、演奏するだけで詩が元来持っている音楽性を聴者に伝えようとしていたのではないかと報告者は考察している。実際、ドビュッシーが器楽曲を作曲する際にマラルメやヴェルレーヌの詩を題材にしているが、それらは必ずしも標題音楽的に詩の意味やナラティブになぞらえて作曲されているわけではない。

こうしたことから、ドビュッシーの意図した、より物質的な「音響」について調査・分析する必要性を感じた。国会図書館での調査は音楽分野の資料のあるリュシリュー翼が改装中で、多くの資料が pdf で公開されているということもあり、こちらは早々に済ませ、より移動・複写の難しいもの、現地で触れる必要性の高いものを優先的に調査した。

まず物質性ということから、18 世紀の美術作品だけでなく、ドビュッシーと同時代の美術作品に触れる必要を感じた。ドビュッシーはたびたび自作を絵画に喩えているが、音素と楽曲の関連の研究においてその点を掘り下げることをこれまで重要視していなかった。そこで、予定になかったオルセー美術館においてモネ、ルノワール、マネ、ルドン、ゴーガンといった画家の作品を鑑賞・調査した。美術史の流れで観ていくと少し前の時代の啓蒙的なものから一気に表現の多様性が見られ、特に作家による筆致の違いがより強調されている。音楽史は美術史に少し遅れて進行すると言われているが、後期ドビュッシーの活躍した 19 世紀から 20 世紀への変り目はまさにこうした筆致の多様性が生まれ始めた頃だ。《ステファーン・マラルメの 3 つの詩》は 1913 年の作曲だが、同年にストラヴィンスキー《春の祭典》が初演され騒動となり、1912 年には既にシェーンベルクがシュプレヒ・シュティンメ<sup>5</sup>による《月に憑かれたピエロ》を発表している。しかしドビュッシーは最後まで機能和声の枠に留まり<sup>6</sup>、定型詩を用いて作曲し続けた。このような、伝統の枠に見え隠れするドビュッシーの前衛を発見することは常に報告者の課題の 1 つである。

また、シテ・ドゥ・ラ・ミュージークにある楽器博物館で、軍楽やオーケストラ以外で太鼓 (tambour, tambourin) と名の付くものを調査した。ガムランのセットにも大小の太鼓がついており、他にもアフリカの楽器など、フランスから見て民族音楽とされる多くの音楽文化で大小(音程は高低となる)の太鼓が用いられていた。実際にドビュッシーがどこで何を耳にしたかという調査が更に必要だが、少なくともガムランのセットの太鼓を聴いていることは明らかである。半獣神という架空の存在の表象に当たってこうした民族楽器の音を想定していた可能性が高い。また、Tambourin de Provence という 18 世紀フランスのやや細長い形状の大型の太鼓の展示があり、tambour に比べて tambourin は小型と漠然と考えていたが、必ずしもそうではないことがわかった。これらの太鼓の問題も、ドビュッシーにおいてはそれらを直接的に模倣しているというより、まずテキストから喚起された具体的な音色があり、それが音楽的要素によって抽象化されているように思われるが、ここからは再度楽譜を分析して考察したい。

### 3. 今後の展望

本調査の結果を元に《雅やかな宴 第 2 集》における音素と楽曲に関する分析を深め、投稿論文にまとめたものを、本年度ないし来年度のお茶の水音楽論集に投稿する。またその過程で、散文詩を用いた《ビリティスの 3 つの詩》及びドビュッシーがその付曲の難しさを吐露した 7 《フランソワ・ヴィヨンの 3 つのバラード》、さらに〈半獣神〉への類似が見られる合唱曲《シャルル・ドルレアンの 3 つのシャンソン》の第 2 曲を分析し、研究対象曲と比較し、ドビュッシーが《雅やかな宴 第 2 集》から 10 年の期間を経て《ステファーン・マラルメの 3 つの詩》という、同時代人の定型詩に回帰したのか、分析・考察を進めたいと考えている。

また、今後このような機会を得ることがあれば、今回改装のため訪ねられなかった国会図書館リニューリウイング、ドビュッシー博物館での調査を行いたい。また休暇時期を避けて渡仏し、識者との面会を行いたい。

今回の渡航では本学の先生方や関係者の皆様方はもちろんのこと、博物館や学会発表の現場でも女性の研究者に多く助けられた。また本研究の先行研究も多くが女性研究者の手によるものである。女性として非常に勇気づけられ、いずれは自分が近代フランス歌曲における音素の扱いという分野においてリーダー的存在になれるべく、研究を深める覚悟を新たにした。

### 4. 謝辞

素晴らしい機会を与えて下さったグローバルリーダーシップ研究所の皆様、海外学会発表支援、大学院生研究補助金の 2 点に渡ってご支援下さった研究・産学連携課の皆様にご心より感謝申し上げます。また、国際音楽学会での発表をご提案下さり、申請から現地での発表準備にいたる全てにおいてご指導、ご尽力下さった井上登喜子先生に格別の感謝を捧げます。さらに、同じくアテネ同行で、様々な場面でご助力下さった同研究室の林いのりさん、マラルメ博物館の Lou ROBERT さん、IMS2022 の運営の皆様、こちらの拙い発表を熱心に聴いて下さり、盛り上げて下さった司会の Ana ALONSO MINUTTI さん、ご意見、ご質問下さった皆様に大いに感謝いたします。

### 注

1. マラルメは『あだなる願い』Placet futile を 1862 年及び 1884 年に『願い』Placet の題名で出版しており、1887 年に大幅な改訂を伴って『あだなる願い』として出版している。ドビュッシーが作曲に用いたものは 1887 年版である。
2. 小阪 2020 | 49
3. 中村 2010 | 171
4. 古い綴りが使われており、現代フランス語で表すと Quand j'ai oui le tambourin となる。
5. Sprechstimme (独) 楽譜に書かれた音程をそのまま歌うのではなく、リズムとおおよその音程を用いて朗読のように歌う方法。
6. Wilson は《マラルメの 3 つの詩》第 3 曲〈扇〉について詳細な和声分析を行い、それまで無調とされていた部分に機能和声をも認めた (WISON 2007 | 262-282)
7. Enquête de Fenand Divoire, Musica, mars 1911, Monsieur Croche et autre écrit, LESURE, François (ed), 1977

### 参考文献

- 菅野 昭正 (2010) 「あだなる願い」, 『マラルメ全集 I 別冊 解題・注解』東京: 筑摩書房: 24-31  
小阪 亜矢子 (2020) 『ドビュッシー『ステファーン・マラルメの 3 つの詩』におけるテキストの音楽化』—第 2 曲「あ

- だなる願い』を中心に一』：お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科修士論文  
中村 順子 (2010) 『ドビュッシーのメロディの世界』 大阪大学文学研究科博士論文  
DEBUSSY, C. (1998) *Correspondance*, LESURE, François ; HENRI, Denis (eds.), Paris : Gallimard  
(1972) *Monsieur Croche*, LESURE, François (ed.), Paris : Gallimard  
MALLARMÉ, S. (1945-1998) *Œuvres complètes*, MARCHAL, Bertrand (ed.), Bibliothèque de la Pléiade, Paris : Gallimard 日本語訳 (1989-2010) 『マラルメ全集 I-III』 菅野, 昭正 ; 清水, 徹 ; 他 (訳), 東京 : 筑摩書房  
VERLAINE, P. (1962) *Œuvres poétiques complètes de Verlaine*, Paris : Editions Gallimard  
FRENCH, P. (1977) *Toward an Explanation of Phonetic Symbolism*, *Word*, 28:3, 305-322  
GRAMMONT, M. (1908) *Petite traité de versification française*, Paris : Colin 日本語訳(1972) 『フランス詩法概論』 杉山, 正樹(訳), 東京 : 駿河台出版社  
LESURE, F. (1994) *Claude Debussy*, Paris : Klincksieck 日本語訳 (2003) 『伝記 ドビュッシー』 笠羽, 映子 (訳), 東京 : 音楽之友社  
McCOMBIE, E (2003) *Mallarmé and Debussy: Unheard Music, Unseen Text*, New York : Oxford University Press  
WILSON, G. A. (2007) "Music and poetry in Mallarmé and Debussy", Ph.D. dissertation: University of British Columbia  
YOUENS, S (1987) To tell a tale : Symbolist narrative in Debussy's "FÊTES GALANTES II", *Nineteenth-Century French Studies*, vol. 16, No. 1/2 (Fall/Winter 1987/1988), 180-191 : University of Nebraska Press

こさか あやこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

## 指導教員によるコメント

小阪亜矢子さんは、今回のパリを拠点とした資料調査ならびにアテネで開催の国際音楽学会大会での研究発表を通して、研究テーマとする「近代フランス歌曲における詩の音声面の特徴の〈音楽化〉」に関するこれまでの研究成果についての専門家からの評価を確認するとともに、新たな研究課題を見出すに至るといふ大きな収穫を得ました。また、ドビュッシーの歌曲作品の考察にとって、現存する自筆稿の調査、ならびに作者の創作環境や関連する芸術作品の実地検分は極めて重要な方法論ですが、この度の「若手研究者支援」(海外調査)のご支援によって、その現地資料調査を実現できたことは、今後の小阪さんの研究の進展にとって、大きな意味を持つに違いありません。今回の一連の研究により、「ドビュッシーの意図した、より物質的な「音響」について調査・分析する必要性」の気づきを得たことは高く評価され、博士論文の研究に大いに期待が寄せられます。

指導教員名 お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系 准教授 井上登喜子

Musical Setting to the Sonority of Poems in Debussy's Late *Mélodies*: A Survey in Paris and Congress Presentation in Athens  
Ayako KOSAKA

My study sought to clarify how Claude Debussy composed the sonority of the text, specifically phonemes, in his late *mélodies* based on contemporary poems. To this end, I surveyed institutions in and around Paris, including the Mallarmé Museum, the Verlaine Museum, the Louvre, Cité de la Musique, and the Bibliothèque Nationale. I also gave a presentation at the 21st Quinquennial Congress of the International Musicological Society at the University of Athens. These activities and my conversations with other researchers have not only reinforced my previous phonological-musicological analysis in terms of semantics but also inspired future research with an eye toward a more material consideration of sonorities outside the text.